
かくれんぼ

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼ

【Nコード】

N6276P

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

小学校の裏山で、恒例となっているかくれんぼ。気の弱い清志は、いつもジャンケンに負けて鬼になることが多かった。しかし臆病なため、暗いところや高いところを探すことができず、いつも友達にバカにされていた。

ある日のかくれんぼでじゃんけんに勝った清志は、誰も怖がって入ったことがない洞窟の入り口までやって来た。そこで、女の子に声をかけられてびっくりする。その洞窟は幽霊が出るといわさになっているところだったからだ。

前編

清志が通う学校ではやっている遊びは、かくれんぼ。

小学校の二年生にふさわしい遊びであろう。放課後になると、女の子も一緒になって学校の裏山の公園でかくれんぼして遊ぶのが恒例となっていた。

しかし……。

「ジャンケン、ポン！」

いつもの通り、鬼を決めるためのジャンケンだ。

「また清志か！ お前ジャンケン弱いよな。何でパーしか出さないんだよ。分かるような気もするけど……」

また清志が鬼になった。いつも負けてばかりなのだ。

仲間が一齐に散らばって行った。裏山といっても、小高い丘のようなものだ。そんなに高くもなければ、広くもない。

木に顔を寄せて三十まで数え終わった清志は、振り返って辺りを見回した。

広くはない原っぱに、建設用の土管が数本、無造作においてある。その横に小さな小屋が建ってはいるが、あとは雑木林が広がっているだけだ。

清志はゆっくり歩いて探し始めた。もちろん、分かりやすい土管や小屋の中など誰もいるはずがない。そんなことは分かっている、取りあえず確認してみる。やはりいつもと同じだ。

誰もいない土管の上に立って、密集している雑木林を見渡した。しかし、林の中に入って行くことは、清志にとって大冒険に等しかった。臆病者の、清志にとっては……。

茂みの少ない場所を選んで、清志はゆっくりと林の中に入って行った。

草のとげがチクチクと刺さる。膨らんでいる雑草の中から、何や

ら飛び出してきそうな気がした。少し離れたところに、古木を積んだ盛り上がりが見えている。誰かがいそうな気がしたが、足下が分らない茂みを歩くことは、清志には怖くてできない。

その横にそびえ立つ大木の幹にも、誰かが清志を見る視線を感じた。しかし、清志は高いところが苦手なのだ。

「いつまで探してるんだよ！ 日が暮れるじゃないか。もう終わり！」

清志の真上から声がした。大きな木の枝の陰からだ。

その声を合図に、みんなが一斉に飛び出して来て、清志は仲間たちを囲まれた。

「弱虫！ 臆病者！」

「お前、それでも男か！」

いつものように散々罵声を浴びた。

「だって、僕……」

「もういいよ。こんな奴に構わないで帰ろうぜ」

清志は動くことができず、ただ下を向いたまま顔を上げることができなかった。

「明日から参加しなくていいからな。清志がいると面白くないよ」

「今度からケンちゃんも鬼やってよ。高いところも暗いところも平気で来るから、隠れ甲斐があるわ」

女の子がそう言った。

清志の中の恐怖心と、男としてのプライドが葛藤していた。しかしどうしても越えられない何かが、清志を仲間から引き離していたのである。

そしてまた今日も、涙しながら帰宅することになった。

あれから数日、恒例のかくれんぼに参加しなかった清志に、久しぶりの声がかかった。

「そろそろ度胸はついたか。やっぱり大勢いたほうが楽しいんだ。

それに、清志みたいな弱い奴がいないと、面白くないよ。今日から

清志も参加しろよ」

やっと仲間に入れてもらえる嬉しさの反面、また鬼になったら、という恐怖感が清志の体を身震いさせた。

「ジャンケン、ポン！」

祈る思いで手を出した。

「珍しく勝ったな。かなり練習してきたんだろ」

「今日の鬼はケンちゃんね。木の上や草むらは隠れちゃダメよ。ケンちゃん、どこでも見つけるんだから」

清志が鬼じゃないことで、この場はよりいっそう盛り上がっていた。

「だったら、あそこしかないよな」

「あんなとこだめよ。弱虫じゃない私たちだつて入れないんだから」
まだ誰も入ったことがない洞窟が林の奥にあった。人が死んだとか、幽霊が出るとか、学校の七不思議にもなっている場所だ。今まで誰も入ったことがない。

「お前、あそこしか隠れる所ないぞ。他の場所だつたら全部俺が見つけてやるからな。さあ、行くぞ！」

その掛け声と共に、みんな一斉に散らばって行った。

それでもやはり木に登る人、側溝の中に入っていく人。繁茂している藪の中に、無理やり体を押し込んでいく人、様々だ。

清志は、四、五人のグループと一緒に、やっとの思いで林の奥まで来ることができた。

目の前に、洞窟の小さな入り口がポツカリと開いている。日の当たらないその場所は、雑草が生い茂り、乱雑に積まれた石には、苔が蒼くこびりついて、何ともいえない不気味さが漂っていた。

「だ、誰か先に入れよ……」

「あんたが先に入ってよ。大きな体してるんだから」

自分から入ることは、誰にもできない。むしろ、誰が入るところを見たいという思いしかなかった。

「清志、お前が先に入れよ。今までかくれんぼの練習してたんだろ。」

度胸試しにいいじゃないか」

みんなが清志を見ている。

「だ、だめだよ。やっぱり度胸ないよ、僕……」

「なんだ、やっぱり弱虫じゃないか。みんな、清志はほつといて違
うところに行こうぜ」

そう言つて、清志を残してみんなが歩き始めた。

静かになったその場所に流れる空気が、ひんやりと冷たくなって
清志の体を包み込んだ。

気になる洞窟の中からは、何やら怪しげな音が聞こえるような気
がする。清志の足がすくみ始めた。

ふと我に返つて、辺りを見回すと、今までいた仲間たちはもうど
こにも見当たらない。

そろそろ鬼が見つけに来るころだ。清志は慌てて隠れるところを
探したが、無数の樹木と生い茂った草むらがあるだけだ。みんなが
どこに行ったのか、清志には全く分からなかった。

「さあ、行くぞ！ ちゃんと隠れたか。すぐに見つけてやるからな
！」

遠くから、僕らを探す鬼の声が聞こえた。

まだ隠れていないのは、たぶん清志だけだ。そして、鬼の音がだ
んだんと近づいてくる。

前に進むことができず、少し後ろに下がった所で、湿った石に足
をとられて転んでしまった。ちょうどそこは、洞窟の入り口だ。

何かを聞こえた。人の声のようにも聞こえる。

よく耳を澄ましてみると、

「こつちにおいでよ。早く、早く……」

突然、洞窟の中から、澄んだ女のこの声が聞こえた。

「ギーーツ！」

清志は驚いて声を張り上げた。そして転んだ時にぶつけたお尻か
ら、一瞬にして痛みが吹っ飛ぶ。勢いよく飛び上がって駆け出した
清志の目の前に、鬼役のケンが立っていた。

「何やってんだよ。まだ隠れてなかつ……」

ケンの声も聞こえないまま、清志は原っぱへと全力疾走していた。そして林をぬけた清志は、再び大きな声を張り上げていた。

その声を聞いて、全員が清志の周りに集まった。

「どうかしたのか。何があつたんだよ」

「で……出た……。出たんだ……」

清志の声は震えていた。

「出たって、何が？ またシヨンベン漏らしたのか？」

「ゆ、幽霊……。あの洞窟に幽霊が出たんだ」

「洞窟って……。お前、中に入ったのか？」

みんなは幽霊の話より、清志が洞窟の中に入ったかどうかが気になっていようだ。

「入り口の所にいたら、中から女のこの声が聞こえたんだ。こつちに来い、つて……」

清志は目を潤ませて訴えた。足は振るえ、歯はガチガチと鳴っている。

「ははっ、あはははっ！ ばっかじゃねえか。お前が臆病者だから、そんなふうに関こえたんだよ。 やっぱり清志は仲間に入れない方がよさそうだな。また最初っからやり直そうぜ、清志抜きで。な、みんな」

清志の言うことを本気にする人はいない。誰もいなかった。

確かに信じられるような話ではない。清志だって、あれが本当に女の子の声だったのか、自信があるわけではなかった。

二度目のジャンケンに負けて鬼になった女の子を一人残して、みんなが林の中に散らばっていく。そして、清志が一人で泣いていることをあざ笑うように、林の中に複数の笑い声が響いていた……。

後編

あれ以来、学校中であの洞窟の幽霊の話しが広まっていた。最初は清志のことを馬鹿にする笑い話だったのだが、しだいに尾ひれがついて、本当に幽霊が出たとか、血まみれの女が追いかけてきたとか、誰かが幽霊に殺された、という驚くような話しにまで発展していた。

その話が大きくなるにつれ、かくれんぼに参加する人数も日ごとに減っていった。清志もあれから参加していなかったのだ。

「なあ清志。お願いだから参加してくれよ。メンバーが足りないんだ」

清志を誘うケンの言葉が、以前よりも優しくなっている。もちろん人数集めのためだ。

「だって僕、臆病者だし、嘘つきだし……」

清志はわざと言ってつた。

「嘘かどうか分からないよ。そんなことより、今日のかくれんぼ、参加してくれるよな」

清志はしぶしぶ立ち上がった。

今では恐怖心よりも、仲間はずれにされる淋しさと、嘘つきだといわれる悔しさだけしかなかったのである。

開き直ったおかげか、今日はすんなりとジャンケンに勝つことができた。

清志は一目散に林の中に走りこむ。すると……。

「こっち、こっち！ 早くおいでよ！」

目の前に、あまり見かけない女の子が立っている。そして優しく微笑みながら手招きしていた。まだ林の中の真ん中ほどだ。

「とてもいい場所があるの。あたしが教えてあげる。少し怖いけど我慢してね。絶対に見つかんないから」

「ちよ、ちよつと待って。君……誰？」

清志の問いには答えないまま、その子は走り出していった。慌てて追いかけたが、慣れた場所なのか、清志はなかなか追いつけない。そしてやつとの思いでたどり着いたのは、あの洞窟の入り口だった。

「ここよ、ここなら絶対に見つからないわ。怖くて誰も入って来れないと思うし、一番最後に自分から出て行けば、あなたはきっとヒーローになるはずよ」

ハアハア息を切らしながら、女の子が言った。

「でも僕、入れないよ。何が出てくるか分からないだろ。君は入ったことあるの？」

「あたしもまだよ。だから入ってみたいの。二人で行けば怖くないでしょ。勇気を出して入ってみましようよ」

女の子の笑顔が輝いている。

「でもこの前、幽霊の声を聞いたんだ。女の声で、こっちにおいでよ、って……」

「それって、きっとあたしの声よ。あたし、あなたを呼んだもん、その岩の陰から。びっくりして逃げて行ったでしょ」

洞窟の入り口の横に、大きな岩があった。その陰からだったら、顔は見えないはずだ。

「なんだ、てつきり幽霊かと……。君、名前は何ていうの？」

「あたしは奈津美。友達はなっちゃん、って呼んでるわ。あなたは清志君よね。あたし知ってる。いつもここから見てたもん」

「いつもここで遊んでるの？ だったら僕がいじめられてるところも知ってるんだ。恥ずかしいなあ」

泣きながら帰る清志の姿を見ていたはずだ。

「いじめられてるんじゃないでしょ。清志君が怖がつてるから、みんな笑ってるだけよ。だから、もっと強くならなきゃ」

「なっちゃんは怖くないの？」

「あたしだって怖いわ。じつは清志君と同じで、臆病者だ、弱虫だ、

っていつもいじめられてるの。だからこの洞窟に入って、みんなを見返してやりたいんだ。 さあ、行きましょ！」

初めて会った女の子なのに、以前から仲のいい友達のような気がする。自然と握り合った奈津美の手は、清志の恐怖心を解きほぐす温もりがあった。

洞窟に二、三步入ると、もうそこには暗闇だけが広がっていた。容易に進むことはできない。

清志がためらっていると、

「ちよつと待って。あたし、いい物持ってる」

奈津美はそう言っ、ポケットから口ウソクを取り出して火を点けた。

鈍い明かりが洞窟の岩肌を照らし出す。小さな鍾乳洞のような洞窟の内部は、入り口は小さいものの、奥に行けば行くほど広くなっていた。しだいに目が慣れてくると、天井から吊り下がった細い岩や、コブのようにこびりついた岩石など、恐怖心どころか初めて見る世界が美しくさえ感じられてきた。

「ほら、見て！ あそこに光が見える。どこかに穴が空いてて、太陽の光が漏れてるんだ。行ってみようよ」

清志たちは光を指して歩き出した。

そう遠くはない。足下に気をつけながらそこまで行った二人に、高い天井に空いた穴から、太陽のスポットライトが浴びせられた。

「誰も知らないだろうな、こんなにきれいな所があるなんて。僕の学校では誰も入ったことないんだよ、この洞窟」

「あたしの学校もそうよ。たぶん、あたしが初めてだもん。それなのに、みんなあたしのこと弱虫だ、って。清志君もそうでしょ」

奈津美の顔に浮かんでいる汗の玉が、太陽の光を浴びてキラリと光った。

「なつちゃんの学校って、どこ？ 君、どこに住んでるの？」

「あたしの学校は、この山の裏。といっても、そんなに遠くないでしょ。隣町なんだから」

二人は近くにある平たい岩にローソクを灯して話し始めた。学校のことや友達のことなど、いろんな話題で話が尽きない。奈津美が同級生である事、小さいときからピアノを習っていたこと、兄弟がいない一人っ子であること。そして、臆病者だといじめられていることなど……。

「今度なっちゃんの家遊びに行ってもいいかな。場所は分かっただし、また一緒にこの洞窟で遊ぼうよ。僕たちだけしか入れない、この場所で」

「ありがとう、清志君。でも、もうここには来れないと思う。それに、家に来てもないかもしれない、あたし」

「どうして？ せっかく友達になったのに」

「あたし、遠いところに行くの。もうすぐお母さんが迎えに来るから、一緒に行かなくちゃ……」

奈津美の声が、小さく悲しく呟いていた。

「どこかに引越すの？ 遠いところなの？ いつ……」

奈津美は何も答えず、どこか遠いところを見つめていた。そして、洞窟の中に流れている清水のように、時間だけが呼吸をしているようだった。

奈津美が突然立ち上がった。

「もうすぐ日が暮れるわ。ほら、太陽の光も……」

穴から差し込んでいた光が、薄くかすみ始めていた。「そろそろ行った方がいいわ。みんなが心配するから」

「今日は本当にありがとう。なっちゃんのおかげで、何だか強くなれたような気がするよ」

「それから……。これ、あげる。昔お母さんがあたしにくれたの。怖いときにこれを握ったら、勇気が出るようなおまじないがしてあるの」

奈津美はそう言って、小さなペンダントを清志に渡した。

「でもこれ、大事なものなんだよ。いいのかなあ」

「あたしはもうすぐお母さんに会えるからいいの。また同じ物もら

うから……」

奈津美は清志の手に、そのペンダントを押し込んだ。「さ、行きましよ」

ローソクの明かりを頼りに、二人はやっとの思いで洞窟の出口まで来ることができた。長かったローソクもほんの少しだけ残っていたが、外から清志を呼ぶ声が聞こえて、奈津美がその火を吹き消した。

洞窟の外で、清志を探している複数の声が聞こえている。太陽は地平線に沈もうとされていて、辺りの植物は深い緑色に変わっていた。「おい、清志！ どこにいるんだ。お前の勝ちだ、出てきてくれ！」

「どこにもいないぞ。あいつ、一人で帰ったんじゃないのか？」
友達がそう言いながら、洞窟に近づいてくる足音が聞こえた。

「もしかしたら、この中にいるんじゃない。だって他に隠れる場所がないもん」

女の子がそう言っている。そしてみんなが集まっているようだ。

「まさか！ あの弱虫が、こんなところには入れるわけないだろ。」

土管の中だつて入れないんだから「
」だつて、他に……」

そんなやり取りを聞いていた清志は、嬉しさのあまり大声で笑いたかった。本当に自分が強くなったような気がしたのだ。

清志はゆっくりと洞窟から出て、みんなの前でにっこりと微笑んだ。

「いつまで探してるんだよ。誰もこの中に入って来れなかったのか。退屈で眠いよ、僕」

みんなが清志を見ながら、ただ啞然として言葉が出ない。それこそ幽霊でも見たかのような顔をして突っ立っていた。

「き、清志、本当にこの中にいたの？ 怖くなかったのかよ……」
「何も出なかった？ 幽霊は……」

清志はちよっぴり笑ってやった。

「幽霊なんかいないよ。でも、ここはもう入らない方がいいと思う。何か出そうな気がするし、コウモリだってたくさんいる。僕は何と出られたけど、次に入った奴は二度と出られないかもしれないな」
みんなの顔が険しくなってきた。

「よく無事で出て来れたわね。清志君、いつの間にそんなに強くなったの」

「強くなったわけじゃないよ。今から強くなるうとしてるんだ。

「さあ、早く帰らないと、中から幽霊が……ワッ！」

清志の叫び声で、みんなが一斉に散らばって行った。林の中は、やつと人の顔が分かる程度の暗さになっていた。

清志がみんなにそう言ったのは、この洞窟を自分のものにしたかったからだ。いや、自分と奈津美の二人だけの場所にしたいからである。

「なつちゃん、早く出ておいでよ。もう誰もいないから」

清志は洞窟に向かって呼びかけた。「なつちゃん……」

しかし、返事は返って来なかった。

清志が洞窟に近づいて中を覗き込むと、そこには誰もいない。暗闇だけが広がっている。

ふと下を見ると、足下に、短くなったローソクだけが、淋しそうに転がっていた。

数日が過ぎたある日、放課後になるとみんなが一斉に裏山へと走って行く。あれから清志も、毎日かくれんぼに参加していた。

しかし、今日は……。

「清志、行こうぜ！」

「ごめん、今日はダメなんだ。ちょっと用事があった……」

清志にとって大事な用事。そう、今日は学校がお昼までだから、奈津美の家に行ってみようと思っていたのである。

裏山を迂回するように、一本の道が隣町まで通じている。その道を自転車で走り抜けた清志は、奈津美から教わった通りに駅の近く

の郵便局までやって来た。ここから奈津美の家が見えるということだった。この先の交差点の角だ。

そこまで行つてから自転車をわきに止め、清志はそつと中をのぞいてみた。門の中には小さな庭、そして大きくはない古びた家が静かに建っていた。

誰もいる様子はなかったが、

「うちに何か用かな」

突然知らないおじさんに声をかけられて、清志は振り返った。

「あの、なつちゃんの家って……」

「奈津美の友達かい？　　会いに来てくれたんだね。さあ、上がりなさい」

奈津美の父であることを清志に言つて、ひっそりと静まり返った家の中まで通してくれた。

「なつちゃんはいるんですか？」

「君は学校の友達なのかい」

「違います。僕、隣町に住んで、最近なつちゃんと友達になつたばかりなんです。裏山の公園でかくれんぼをして……」

清志は奈津美と知り合つた経緯を話し始めた。

「奈津美には、いつ会つたの？」

お父さんはなぜか不思議そうに訊いて来た。

「一週間くらい前です。裏山の洞窟に一緒に入って、この家を教えてもらつただけだ」

「一週間……」

しばらく考えていたお父さんだが、「そうか、奈津美のことは知らなかったんだね。あの子は……」

そう言つて、奈津美のことを少しずつ話し始めた。

奈津美も学校の友達と裏山でかくれんぼをしていたこと。弱虫で、みんなからいじめられていたこと。お母さんを早くに亡くしていること。一年前に交通事故にあつて植物人間になつてしまったことなど。そして　一週間前に死んでしまったことも……。

清志は何を言われているのか分からなかった。一年間全く目を開けていない奈津美に、最近会ったばかりなのだ。夢なんかじゃない。あの手のぬくもりも、洞窟で見た嬉しそうな笑顔も、清志は絶対に忘れることなんてできない。それに清志のポケットには、奈津美からもらったペンダントだつて入ってるんだから。

「そうか、奈津美はやつとあの洞窟に入ることができたんだね。誰も入れない場所だから、どうしても一度行ってみたいと言ってたんだよ。誰か一緒に行ってくれたら、って……」

お父さんは優しく微笑んでいた。

「でも僕、本当に……」

「君は嘘は言っていない。もちろん信じてるよ。たぶん奈津美の意識があの洞窟に行つてたんだね。君が連れて行ってくれたんだ。ありがとう」

「なつちゃん、喜んでました。僕がなつちゃんに連れて行つてもらつたんです」

「それがね、一年間ずっと眠つたままで、表情一つ変わらなかった奈津美の顔が、一週間前に初めて笑つたんだよ。何かいい夢でも見てるのかと思つてね。たぶんその時、行つてたんだね、あの洞窟に。あの子も思い残すことは無くなつたんだろう。その日の夜、お母さんのところに逝つたんだから」

お父さんは、壁に掛けられた奈津美の写真を見ながら、こぼれる涙を手で拭つた。

「僕、なつちゃんに返さないといけない物があるんです。勇気が出るペンダント貰いました。でもこれ、なつちゃんが持っていたほうがいいと思うんだけど……」

「それは君が持っていないさい。奈津美の形見だ。それに見てごらん、ちゃんと奈津美も胸に付けてるだろう」

写真に写っている奈津美の胸に、同じペンダントが輝いていた。

そう、なつちゃんが言っていたんだ、お母さんから同じものが貰えるって……。

清志はなぜか、泣くことができなかつた。実感がわかないということもあるが、涙を流していると、「弱虫、泣いちゃだめ!」という奈津美の声が聞こえそうな気がしたからだ。

壁に掛けられた写真の中に、キラリと光る何かが見えたような気がした。それはペンダントの光なのか、洞窟の中で見た喜びの汗なのか、清志には分からなかつた。

ペンダントを握りしめて見ていると、奈津美は清志を励ますように笑っているだけだつた。

「ジャンケン、ポン!」

「またケンちゃんの負け。最近弱いわね。どうしたの?」

「俺が弱くなつたんじゃないよ。清志が強くなつたんだ。清志にだけは負けたくないけど、洞窟に入ってから何だか変わったぞ、こいつ」

自分でも不思議なくらい勝っているし、最近清志が、鬼になるとは少なかつた。

ジャンケンに勝つた清志は、一目散に雑木林の中に駆け込んで行った。

藪の中を走り抜けたその場所に、あの洞窟の入り口がポツカリと空いている。清志は近寄つて中を覗いてみた。

そこにはあの時のまま、小さくなつたローソクが落ちている。清志は優しく微笑んで、胸に付けているペンダントを握り締めた。

「なつちゃん、ありがとう……」

清志は洞窟の中には入らず、林の中へと走り込んだ。もうここに隠れることはないし、誰も入ることはないだろう。

だってこの洞窟は、僕となつちゃんの二人だけの秘密の場所なんだから……。

清志の目の前に、今まで誰も登つたことがない、大きくて高い木が立っている。

そして、その大木に手をかけた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6276p/>

かくれんぼ

2010年12月28日00時40分発行